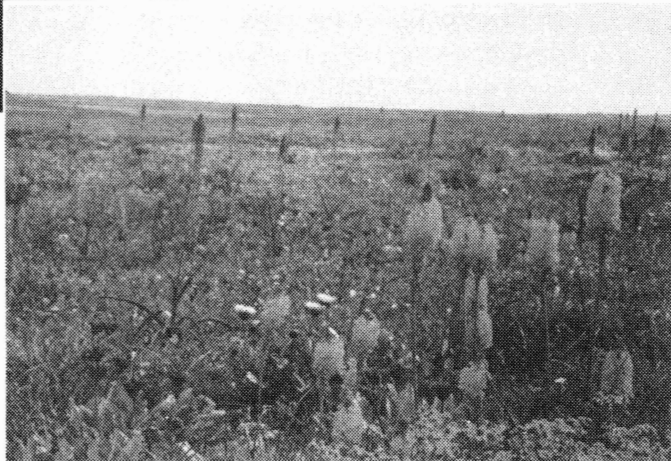


Trial & Error トライアル・アンド・エラー No.64

試 行 錯 誤



バスの運転手フレデリックとその家族④
南アフリカのお花畑⑤



特集 南アフリカと日本の関係

南アフリカと日本の関係	2
アパルトヘイトとは	5
われわれは自由になります	6
私の国 南アフリカ	8
ソエト行きのバス	10
南アフリカとともに20年	12
JVC 会員はアパルトヘイトをどう考えているか	14
マーシャ村通信 女の仕事について	16
クロントイ・スラムとカオイダン・キャンプを訪ねて	18
タイの仲間たち	21

南アフリカと日本の関係

南アフリカは日本にとって遠くて近い、そしてやはり遠いという不思議な国である。その距離は南米とともに日本から最も遠い地域に属している。まさに地の果てという感じであるが、南アフリカは日本のアフリカ貿易の輸入の50%、輸出の28.9%(1984)を占めるなど、経済の結びつきは強い。

特に日本の自動車やコンピューターに使われる希少金属(レアメタル)の半分以上を南アフリカに依存している。そのため表向きは反アパルトヘイトを唱えながらも実際は友好関係を保ちたいというのがホンネでもある。そのいい例が日本・南ア友好議員連盟である。

しかしこの二面性に後ろめたさがあるのか、南アフリカの情報は意識的に抑えられて、ほとんど日本に入ることはなかった。「南アフリカ? 人種差別の国でしょ。でもあまり関係ないな」と多くの日本人は答えるに違いない。

日本人は商売のために名誉白人の地位を手に入れた。そして自分たちとつきあう白人と商売のこと以外見えなくなってしまった。まして日本で生活する私たちにはレアメタルが日常生活のどこに入りこんでいるのか見ることができない。さらに黒人は黒子のように白人の影に隠れてしまっている。

南アフリカはたしかに遠い。意識の上でもはるかに遠い。ものを通してそこに住む人々と私たちの関連性が見えてこない。黒人が受けている不当な待遇も私たちとはまるで関係ないことのように思ってしまう。そしてその無関心さは現状の肯定を意味する。反アパルトヘイトとは南アフリカの黒人たちの支援ばかりではなく、私たちの無関心さとも戦うことではないだろうか。アパルトヘイトを助けているのはこの無関心なだけだから。日本と南アフリカ、いったいどんなつながりがあるか調べてみた。

日本・南アフリカ関係史

第一次世界大戦

日本と南アフリカの関係は1910年、南アフリカ連邦が成立した年に始まる。この年両国は公的に接触し、日本はケープタウン在住の白人に名誉領事を任命している。

貿易は1912年に始まった。第一次世界大戦のためヨーロッパからの物資が途絶えた南アフリカに日本は大量の商品を送り、輸出額は急速に増えた。日本は積極的に経済外交を進め、1916年に経済使節団を派遣、1918年にはケープタウンに日本領事館を開設している。さらに1926年にはケニアのモンバサ経由で南アフリカのダーバンにまで定期航路が開かれた。

名誉白人

第一次世界大戦が終結すると、日本の対南ア経済進出にはいくつか問題が起きてきた。ヨーロッパの伝統的貿易相手国(オランダ、フランス、ドイツ、ベルギー等)の復帰、日本のダンピング輸出や大幅な出超による経済摩擦、1913年の「移民法」の関連からアジア人の排斥、それにイギリス資本の支配的な地位があった。

移民法によって日本人も入国が制限されたので、日本はこの中のアジア人の中から日本人を除外するように申し立てた。これは1930年に認められ、白人と同様に入国が自由になり、経済活動は活発化した。

それから約30年後、1960年に起きたシャープビル虐殺事件に国際的批判が集中し、南アフリカは孤立化に追いこまれた。しかし日本は第二次世界大戦中に断絶した両国の関係を再開し、1961年には日本人は白人居住地に住むことが認められた。つまり「限定つき白人」、名誉白人となったのである。

対南ア制裁

以上のように日本は南アフリカと経済関係を保ってきたが、正式な国交は結ばれていない。南アフリカのアパルトヘイト反対の声が広がる中、1971年日本は大蔵省告示で①南アフリカに対する直接投資の禁止②文化、教育、スポーツ交流を目的とした南アフリカ人にビザを発給しない③対南ア武器輸出と南ア製の武器輸入の禁止を表明した。

加えて1985年10月には外相談話として①南アフリカの軍隊、警察などへのコンピューター輸出禁止②南アフリカ産金貨の輸入自粛③黒人の地位向上を旨とし、南部アフリカへの人づくりの拡充④南アフ

南アフリカ

面積	122.1万km ²
人口	2929万人
首都	プレトリア(行政), ケープタウン(立法), ブルームフォンテン(司法)
住民	バントゥー系アフリカ人68%, 白人18%, カ ラード(混血)9%, アジア人3%
言語	アフリカーンス, 英語(以上公用語) ズール語, コサ語, ソト語など
現況	アフリカ大陸南端部にあり, 金, ダイヤモン ドなどほとんどすべての鉱物資源に恵まれ, アフリカ最大の工業生産を誇る。また農牧業 も安定しており, 文化水準も高い。しかし有 色人種に対する隔離政策とナミビアの不法統 治などで国際的批判を浴び, 世界的な経済制 裁のうねりの中で孤立化してきている。



歴史 17世紀半ばにオランダが, 18世紀末からイギリスが入植した。イギリスに追われたオランダ系移民(アフリカーナ, またはボーア人)は奥地へ移動し, バントゥー系部族の土地を奪っていった。それらの土地で金やダイヤモンドが発見されると, その利権をめぐりボーア人とイギリスの間で戦争がおこった(ボーア戦争)。イギリスはこの戦いに勝利し, その支配を確立した。ボーア人はそれぞれの地域で自治を認められ, 1910年ケープ植民地とともに自治領<南アフリカ連邦>を作った。

1913年土地法によってアフリカ人の隔離政策が始められた。一方アフリカ人はアフリカ人民族会議(ANC)を結成し, インド人はマハトマ・ガンジーの指導の下で不服従運動をするなど抵抗運動を展開した。

1948年, 人種隔離政策(アパルトヘイト)を国是に掲げた国民党が総選挙に勝利すると次次とその政策を実行していった。そしてそれに比例して反アパルトヘイト運動も高まり, 1960年, パス法反対のデモに警官隊が発砲するというシャープビル虐殺事件が起きた。

以来現状維持を望む白人政権と黒人解放勢力の戦いが続き, ここ数年黒人解放を支持する国際世論が高まっている。

リカの日本企業に対し, 雇用面で人種差別をしないよう要請をした。

1986年9月19日の閣議では①鉄鉄, 鋼材の輸入を認めない(既契約分を除く)②南アフリカ人への観光ビザの発給停止と国民に南アフリカへの観光の自粛を要請③南アフリカとの航空機相互乗り入れ停止の確認④国家公務員の南ア航空機国際線使用禁止の4項目の制裁措置を追加した。

これらの制裁は南アフリカに対する国際的批判を背景に日本も同調したものであるが, “自粛”とか“要請”などの表現を使い, 強制力は抑えられている。経済制裁にはあまり積極的でない米・英と共同歩調をとっており, 9月19日の制裁強化でも ECの措置に含まれないとして, 鉄鉱石, 石炭の輸入禁止をその項目の中からはずした。

ここで注意しなければならないのは議会と世論の反応である。制裁措置に消極的なレーガン大統領やサッチャー首相はともに野党の追求を受け, 米議会上下両院は対南ア経済制裁法案を可決している。これに対し日本では政府の発表した措置に対し, 逆制裁でレアメタルの輸入が止められるのではないかという危惧はあるが, それ以上の関心は示されていない。

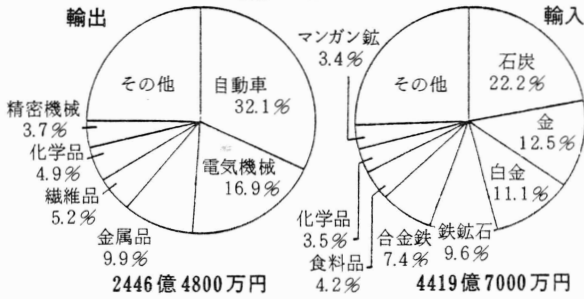
人の動き

日本は今までも文化, 教育, スポーツ交流を目的とした南アフリカ人にビザを発給してこなかったが, かなり多くの人々が日本に入国している。その数は1984年, 8352人, 1985年は3895人である。激減した理由は経済制裁に伴う南アフリカの不況の影響と思われる。

85年の場合3895人の内短期滞在者は3712人で, ほとんどが観光, 見学, 講習会への参加を目的としているが, どこまでが入国を禁止している文化, 教育, スポーツ交流と違うのか見きわめることは難しい。今年の9月19日の追加措置では, 南アフリカ人への観光ビザの発給停止と国民に南アフリカへの観光の自粛を要請している。

それでは日本人は南アフリカへどのくらい入国しているのだろうか。1985年の総計は3916人。アフリカ全体の渡航者の11.8%にあたる。圧倒的に業務目的の渡航が多い。観光は989人。南アフリカ向けのツアーを扱っている代理店は10月1日現在, 2社確認することができた。1社は11月8日出発の定員20人のツアーの内16人の申し込みがあり, 南アフ

対南ア貿易 (1985年度)



リカッターは売り出すとすぐいっぱいになるほど人気があるという。もう1社はかなり手広く南アフリカリカッターを扱っていて、2人以上参加者があれば出発できる。ヨハネスブルグフリータイム10日間は54万8000円だそう。

南アフリカは多くの日本人にとっては関心のある国ではない。その一方でアパルトヘイトに目をつぶり無邪気に旅行を楽しむ人々がいる。もちろん旅の仕方によっては南アフリカの現実に触れることもできるが、パッケージ・ツアーに織りこまれた地域だけでは美しい南アフリカの印象しか残らないだろう。

物の動き

日本と南アフリカの関係は、ほとんど物の動きによって成り立っているといってもいいすぎではない。1984年の対南ア貿易は輸出が18億3992万ドル(4344億3800万円)、輸入は16億1000万ドル(3816億2700万円)であった。輸出品目は事務用機械、通信機器、自動車、カメラ、輸入品目は金、マンガン、原料炭、五酸化バナジウム、食料品などである。85年になると西側企業の南アフリカ撤退による不況で、輸出は前年比44.6%減となった。しかし輸入は鉄鉱石や食料品の伸びがあり、18億4388万ドル(4419億円)と14.5%の増加を見た。

これらの品目の中で注目を浴びているのが金である。折からの財テクブームに乗って、85年は550億円の金を輸入した。これは84年の4倍にあたる。クルーガーランド金貨の輸入を自粛しても、スイスや英国にストックされた金を購入することは結果的に金相場を支え、南アフリカの経済を支えることになる。

日本からの輸出品は白人の便利な生活のために、輸入品は黒人の低賃金労働による低価格によって、日本の産業や個人のぜいたくのために取り引きされている。南アフリカ経済を支えている黒人のために取り引きされるものはない。経済制裁による不況で会社は倒産し、結果として多くの黒人の失業者をつくり

出した。しかし、黒人たちは何十年も白人政権の下で搾取され続けてきた。もう少しがまんすることはできるという。対南ア経済制裁については都市に住む黒人の約77%が支持している。

アパルトヘイトと日本人

多くの日本人は南アフリカの白人に対して漠然とした警戒心を持っている。初めて南アフリカを訪れる人は、何か不愉快な思いをするのではないかと身構えるようだ。ところが実際に現地に行ってみると、生活は白人と変わらず、差別されることもない。そこでだいに白人社会になじんでいき、その結果すべてが見えなくなる。差別される不安がなくなると、ごく自然に差別する側にまわっているのだが、自分ではその身勝手さに気づいてはいない。

しかしだからといって現地にいる日本人が積極的にアパルトヘイトを支持しているというわけではない。むしろ商売拡大には障害だと思っている。経済制裁による消費の落ちこみは好ましいものではなく、貿易関係者はアパルトヘイトの廃絶によって直接投資解禁になることを望んでいる。また黒人を過激に追いやり、南アフリカが共産化することを最も恐れている。最先端技術に不可欠のレアメタルの産地はアフリカ、ソ連、東欧、中南米といった社会主義国や政情不安の国に多く、南アフリカが共産化することだけは世界戦略上どうしても阻止しなければならないと考えている。これは西側諸国がアパルトヘイト反対を訴え、経済制裁を行っている理由の1つでもある。

こうしてみると、南アフリカは日本にとって昔も今も貿易の相手国でしかない。「非白人だが商売のためにつきあいましょう」「人種差別をしているようだが商売のためにつきあいましょう」両者の思惑が一致し、それ以外のことは見ようともせず過ごしてきた。その結果、私たちは日本にいながらにしてアパルトヘイトを支援しているのである。しかしこのままでいいのか。自分たちの生活だけ守ればいいのか。

今白人政権は窮地に追いこまれている。黒人たちが権利を回復するのも時間の問題だといわれている。その時私たちは「日本もアパルトヘイトに反対でした」と、黒人たちに手をさし出すことができるだろうか。

外の世界への無関心さが東南アジアの森林を破壊し、南アフリカの黒人たちを苦しめている。このエゴイズムに気づくこと。これが私たちのアパルトヘイトの第一歩と思われる。

(この記事を書くにあたりアフリカ行動委員会の協力を得ました)

アパルトヘイトとは

アパルトヘイトという言葉がひとり歩きしている。南アフリカ共和国白人政権の人種差別政策の代名詞となっているこのアパルトヘイトは、一つのまとまった制度や政策ではなく、多数の法律から形づくられる社会・政治システムなのだが、個々の法律については何がどのようにアパルトヘイトの部分をしているのかがわかりにくいこともあって、アパルトヘイトと言えはとにかく人種差別なのだとなってしまう、そんな傾向がアパルトヘイトについてはあるような気がする。ここではそのアパルトヘイトのわかりにくい法体系を少し整理してみたい。

アパルトヘイトが一つのシステムとして確立してくるのは、第二次大戦後に現在の与党である国民党政権が選挙キャンペーンとしてアパルトヘイトを掲げてからのことである。しかしそれはアパルトヘイトという言葉の登場であって、その骨格をなす法体系はもっと以前から存在していた。そうしたアパルトヘイトを支える骨格として最も古くかつ重要な法律は、アフリカ人土地追出し政策の基礎として1913年に制定された「原住民土地法」であろう。

今日、白人が国土の87%を保有し、アフリカ人は不毛な13%の土地に追いやられて生計のために白人農場や鉱山で働かざるを得ないアフリカ人の出稼ぎ労働システムを創り出した根拠と言えるこの法律は、アフリカ人の不動産自由保有権を禁止することによって経済的にアフリカ人の地位を低いものに抑えつ

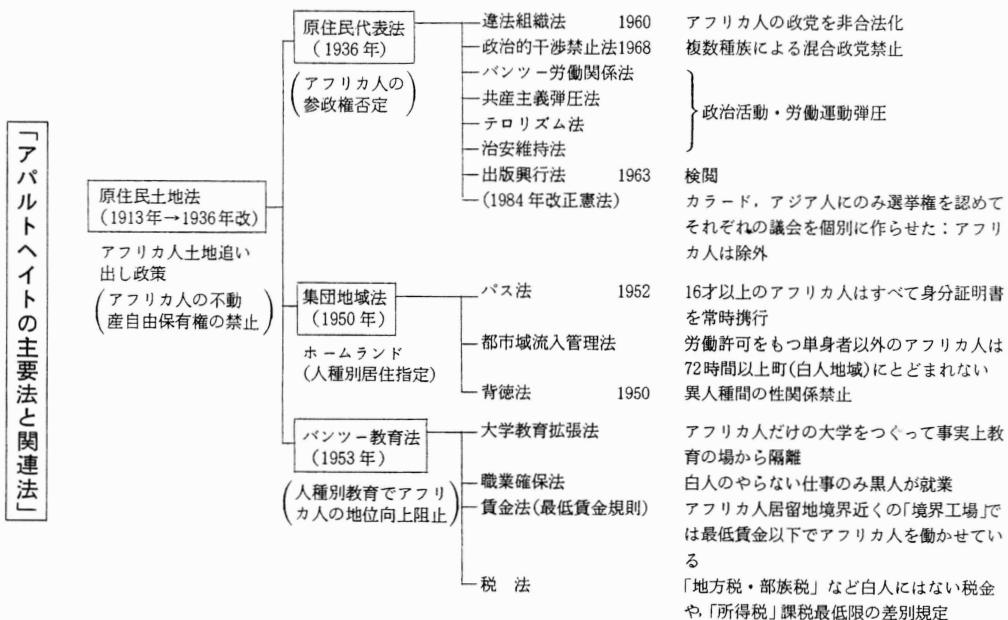
けている。そしてそうした地位にあるアフリカ人が自らの地位向上を図ることを阻止するため、さらに政治的・社会的差別が法制化されている。

1936年に制定された「原住民代表法」はアフリカ人の参政権を禁止する。1950年制定の「集団地域法」はホームランドと呼ばれる黒人居住区を指定することによって、アフリカ人を不毛の土地に隔離する。そして1953年に制定された「バンツール教育法」は人種別の教育を法制化することによって、アフリカ人の教育機会を制限する。

以上の4つの法律こそアパルトヘイトという人種差別システムを支えている主要な柱と言えよう。もちろん、一般に有名な「パス法」や「背徳法」等もアパルトヘイトを構成する重要な法律であることには違いない。しかしながら、アフリカ人の最も基本的な権利を抑圧する上記の4つの法律は、その他の様々な関連法律群の根幹をなしていると思われることから、特に主要なものとして位置づけてみた。

試みに、アパルトヘイト関連法の一部について相關図を作ると下図のようなものになる。各法律のグループ分けは全く独断によるものであることをつけ加えておきたい。「背徳法」や「パス法」は国際世論に押されて廃止となるようだが、根はもっと深いということが、少なくともこの図からわかっていただけるのではないかと思う。

なお、本文を書くにあたっては、勝俣誠氏の「限界にきた南アのアパルトヘイト」(エコノミスト'86. 8. 12)を参考にさせていただきました。



われわれは必ず自由になります

デズモンド・ツツ大主教はANC(アフリカ人民族会議)のネルソン・マンデラとともに南アフリカの黒人の指導者として知られている。8月に広島市の招きで来日し、8月7日、日比谷野外音楽堂で演説を行った。

大主教は自由も権利も奪われた黒人たちの現状を訴え、参加した人々に抑圧する側に立つのか、抑圧される側に立つのかと迫った。以下はその演説の要旨である。なお来日時はヨハネスブルグ教区の主教であったが、9月7日にケープタウン教区の大主教に就任し、南アフリカ聖公会の最高責任者となった。

南アフリカにはアパルトヘイトによって迫害され、私以上に苦しんでいる人々が無数にいます。アパルトヘイト廃絶のための闘いにおいてじつに多くの人々が犠牲を払っています。私をそういう人々の代表としてみて下さい。

南アフリカのアパルトヘイトとは、人間とは本来疎外され、分裂するために生まれ、互いに敵意を持つために生まれているという論理を前提とした政策です。この政策は人間の位置とはあまり関係のない、皮膚の色によって位置づけられています。

黒人たちは白人がひいた区分けによって、あらゆる政治的決定への参加を排除されています。人口の20%にすぎない白人は、政治権力をもつがゆえに、全国土の87%を所有しています。ところが南アフリカで人口の大多数を占めるわれわれは、全国土の13%しか所有できません。

私はノーベル平和賞を受賞しました。9月には南アフリカ聖公会の大主教に就任します。私は55歳です。しかし母国においては投票権を持っていません。ところが白人は白人というだけで18歳以上の男女に投票権があるのです。またわれわれは黒人であるというだけで、ソエトのような黒人居住区に住むことを強制されています。かりに白人が住むようなところに家を建てる金を持っていたとしても法律によってそれは許されていません。

アパルトヘイトとはとりもなおさず、憲法自体が黒人は劣等だ、黒人は他の人間とは違うのだと語るものなのです。政府は黒人は南アフリカ国民ではな



デズモンド・ツツ大主教

1931年10月7日、トランスヴァール州の教師の家に生まれる。プレトリアの師範学校卒業後、高校の教師となる。1961年、英国国教会の牧師となり、ロンドン大学で神学を学んだ後、南アフリカで神学を教える。

1975年、ヨハネスブルグ主教管区で黒人初の教区牧師となり、アパルトヘイト反対運動を本格的に行う。1976年、レトト主教。1978年、南アフリカ教会協議会事務局長。1984年10月、ノーベル平和賞受賞。1985年2月、ヨハネスブルグ主教。1986年9月、南アフリカ英国国教会大主教。

いといます。しかし私の父もその父も、考えられる限りの系譜をたどってみても、みな南アフリカで生まれています。白人はあとからやってきました。南アフリカ政府を構成しているのは、海外からやってきた白人なのです。ところが彼らはわれわれに向かって、お前らは南アフリカの人間ではないというのです。

こうして350万人の黒人が自分の生まれた場所から追われ移住を強いられています。人々はあたかも廃棄物のように貧しい都市居住区やバンツースタン(ホームランド)へ捨てられ、不必要に苦しめられているのです。

南アフリカの奇蹟というのは、3世紀以上もの間白人によって苦しめられてきた黒人が、今でも白人について語るができることです。黒人のために必死の仕事をしてくれた白人の女性が亡くなったとき、彼女の弔問には2万人の人々がかけつけました。その9割が黒人でした。今でも黒人社会の中には莫大な善意が存在しています。黒人が求めているのは、神の形に似せて作られた人間が、人間であることを認めてほしいということだけなのです。

南アフリカというのは、白人居住区にいる出稼ぎ労働者の夫のもとに妻が許可なくやってきて、一緒に寝ることで妻が罰せられる世界で唯一の国でありましょう。

わが国の人民は決して暴力が好きではありません。ANCが結成されたのは1912年のことでしたが、それから1960年までは、非暴力的方法で南アフリカの

歴代の白人政権がとってきた邪悪な手段に抵抗し、変革をもたらそうとしてきたのです。

南アフリカでノーベル平和賞を受賞したのは2人も黒人です。1960年には黒人の移動を厳しく制限するパス法に反対して立ち上がった人々が、シャープビルで69人殺されました。彼らのほとんどが背中に銃弾を受けていました。逃げる最中に撃たれたのです。

1976年6月16日、わが国の青少年たちは劣等な教育制度に抗議して立ち上がりました。その結果500人が殺されたのです。このように黒人たちの非暴力の抗議に対する国家の返答は、以前よりエスカレートした暴力だったのです。

1984年、南アフリカで新憲法が施行されました。しかし、そこでも人口の73%を占める黒人は排除されたままです。このような事態に怒った黒人たちが抗議行動へ出た結果、あのような地獄図を現出させてしまったのです。各地で人々が殺されました。4歳の子どもが治安部隊によって殺されました。84年以来、全部2000人もの人々が殺されているのです。そのほとんどが、治安部隊による虐殺であります。なかには同胞の黒人からアパルト体制の協力者という理由で殺された者もあります。

抑圧の状況は耐え難いほど厳しくなってきました。国家非常事態宣言が二度出されました。公正な裁判なしに人々が拘禁されています。また現在の非常事態宣言下ではマスメディアも法律で厳しく報道管制され、いったいいま何が起きているのか知るすべがありません。南アフリカ政府は、アパルトヘイト体制がいかに暴虐に満ちたものであるかを世界から見られてしまうことを非常に恐れています。

こうした状況にもかかわらず、われわれは南アフリカを平和的、理性的に変革しようとしています。今年も2度私はボタ大統領に会い、アパルトヘイト政策はやめるべきだといっておりますが、彼らはわれわれのアピールを退けているのです。

したがって、南アの現状を平和的に改革する最後のチャンスは、国際社会が決然として関与することにあるのです。私はこの4月、国際社会に向けて、南アフリカへの経済制裁をとるよう訴えました。この目的は、①非常事態宣言の解除②都市居住区からの治安部隊の撤退③ネルソン・マンデラをふくむ多数の政治犯の釈放④政治諸組織の合法化⑤黒人と白人が円卓を囲み、黒人と白人の調和的共存を可能とする憲法を制定する、ことであります。

さて、日本は偉大な工業国家であり、同時に南アフリカの主要な貿易相手国であります。南アフリカ政府は日本との貿易を重視しておりますので、南アフリカに在住する日本人を名誉白人と称し、そのように処遇しております。南アフリカにいる有色人種の人々が日々体験させられている侮辱を日本人が受けまいよとの配慮からです。しかしあなた方日本人が名誉白人である限りにおいて、存在の意義があるというのでは、それは日本人に対する侮辱ではないのでしょうか。

私はアパルトヘイト政策の犠牲者たちの代表として、日本の皆さんに南アフリカの自由のための南アフリカの黒人、白人をふくめた人間の解放のための巨大な運動の一翼を担っていただきたい、と心から願うものであります。それをするということは、南アフリカ政府に対して経済制裁をとることです。

われわれがお願いしているのは、政治判断をしてくれとか、経済判断をしてくれというのではありません。あくまでも道義的判断をしていただきたいと念じているのです。

不正義で、正義のないところ、抑圧が存在するところでは正しい判断はできません。まさに、象がネズミの尻尾の上に座っている時に、あなたが中立の立場をとれば、ネズミは喜ばないだろうが、象には、よかろう。お座りつづけなさい、というのと同義であります。これは抑圧を続けなさいということなのです。

日本のみなさんに、あえて問います。

みなさんは正義の側に立たれるのですか。それとも不正義の側に立たれるのですか。

みなさんは抑圧の側に立たれるのですか。それとも解放の側に立たれるのですか。

正しい側に立たれるのですか、邪悪の側に立たれるのですか。

われわれは必ずや自由になります。私はそれを確信しております。

自由になることについて、われわれは議論しようとは思っておりません。問題はいかに、いつかということでもあります。われわれは必ずや自由になります。われわれは必ずや、わが国の解放の過程の一部を担うでありましょう。そして、われわれが自由になった暁には解放のために支援してくれた皆さんのことを決して忘れないでしょう。

協力 アフリカフォーラム

私の国 南アフリカ

—すべての民族・文化の違いを越えて—

デズモンド フェルナンデス

貧しい人々

44年前、私はヨハネスブルグの最も貧しい地区で生まれました。この地域に訪れる日本人には、そこが貧しい地区であるということは信じられないかもしれません。というのも、日本の基準からすれば、家はかなり大きく、ほとんどの家の前には小さな庭がついているからです。通りは広く、夏には影をつくる木が並んでいます。そこは、たとえ貧しくても自分たちはきちんとして、きれいな好きであると自負している“誇り高き貧困”の地域でした。

ぜいたくななどはほとんどできませんでしたが、私たちは食べる物には不自由はしませんでした。果物、野菜は大変安く、しかも私の父が食肉会社に勤めていたので、ただでたくさんの肉が手に入りました。でもほとんどの私の友だちはそんなに運はよくなく、肉を食べるのは週に3回ぐらいでした。

私は南アフリカの白人の大多数を占めるイギリス系にもアフリカーナにも属していません。私の祖母はポルトガル人、ドイツ人、スコットランド人、アフリカーナで、文化的様式や宗教はさまざまでした。私は南アフリカ人であると同時に、ポルトガルの市民権も得ています。

私の両親は働き者で、子供たちの教育にも熱心でした。そして新しく郊外に自分たちの家を持ちたいと願うようになりました。幼かった私は、自分たちが貧しいなんて知るよしもありませんでした。貧しい人たちはフィエタスに住んでいるのだと思っていました。当時はまだ人種の異なる人々でも、どこでも好きな所に住むことが法律で認められていました。フィエタスは私の家から500メートルのところでしたが、黒人、カラード、インド人の居住地域でした。その状況はとてもひどく、私の両親はそこに行くことを禁じました。もちろん私たちは行きましたが。

フィエタスは人が多く、通りは不潔で狭く、木はほとんどありませんでした。家はうすっぺらのトタン板でできた掘っ立て小屋でした。非合法の居酒屋がたくさんあり、黒人はアフリカビールや彼らには禁じられている白人用の酒を飲んでいました。マリファナも手に入り、このあたりは暴力と犯罪の地域として知られていました。

フィエタスの境界には、インド人が住んでいました。彼らは通常貿易商で、自分たちの文化と宗教を守っており、教育にも力を入れていました。

第三世界の黒人が第一世界の白人を支える

私は白人用の地元の政府の学校に通いました。授業料はとても安く、教科書も支給されました。教育はとても良く、イギリスの基準に基づいていたと思います。そしてほとんどの南アフリカ“白人”は、実際ヨーロッパの延長として生活しているという考えで育ちました。

黒人は教育を受けておらず、茂みに住んで卑しい仕事をするという考えが広く浸透していて、それは私たちの文化のまぎれもない一部でした。私たちはアフリカ人を嫌い、軽蔑するように教わりはしませんでした。なぜ彼らが貧しく、教育を受けていないか疑問に思うことも教わりませんでした。日本の皆さんにはこの人種差別を理解するのは難しいでしょう。日本人と韓国人の間の問題よりも根は深いのです。白人は今だに第三世界にとどまっている黒人の労働のおかげで第一世界を創りあげました。

私が若い頃、アパルトヘイトが導入される前ですが、白人の多くは、聖書の中にあるようにアフリカ人は知性が劣っていて、下等な生き物という考えを持っていました。そしてアフリカーナは黒人のことをカフィリスと呼んでいました。これはアラビア語“異教徒”という意味です。南アフリカでは黒人に対する蔑称として使われ、私の家ではこの言葉を使うことは禁じられていました。

私の母とその母親はコサ族といっしょに育ち、彼らの言葉を話し、彼らの文化を尊重していました。私たちが農家のいとこたちを訪れた時は、他のアフリカ人の子供たちと遊びました。しかし町では遊ばせませんでした。白人農家の子供たちにとって、子供時代に最も仲の良い友だちにアフリカ人やカラードの子供がいるのはごく普通のことです。成長すると白人の子供は寄宿学校に通わされるので、子供のころの友だちはとり残されてしまいます。彼らが戻ったら友情もまた続くわけですが、彼らの関係は主人と従者という色合を帯びてきます。

この土地に住む黒人が非常に複雑な社会的ルール

や宗教、種族の規範などがあるということに気づいている白人はほんの一握りです。多くの白人の誤った態度はキリスト教宣教師のせいであると、私は考えます。

学校に通う頃アパルトヘイトがとり入れられました。高校、大学、医師としての訓練を受けている間に、人々は人種によって決められた地域にしか住むことができなくなりました。白人、アフリカ人、カラード、アジア人という具合にです。異人種間の結婚、性的交渉は禁じられました。白人だけが大方のレストラン、映画館、病院等に行くことが認められていました。アパルトヘイトが厳しい頃、白人用病院のすぐ近くで負傷した黒人が黒人用病院で手当を受けるため、救急車を待たなければならなかったことを知っています。

しかし幸いなことにこのばかげた制度は崩壊し始めました。この主な理由はアパルトヘイトを維持していくために膨大なコストがかかるということです。

新しい社会への動き

多くの南アフリカ人と同様に私も政府の方針には反対です。南アフリカの同胞が私たちと同じ利益に預かり、社会に貢献してほしい。この素晴らしい国で人生を楽しんでほしいのです。民族や文化の違いを考える時、私たちは自分たちが優れているとは思いません。南アフリカに新しい融合社会がいつの日にか生まれることを待ち望んでいます。変化がすでに起きていることは明らかです。事実、いつその日がくるかという議論でもちきりです。

変化にはずみをつける最良の方法は黒人労働者と労働組合の影響力を強め、今までに不利だった大多数の人々の教育改革を推し進めることです。これにはお金と信頼が必要です。私は黒人は白人に対し好意を持っていると信じています。そして日本、アメリカ、イギリス、フランスなどの豊かな国は、黒人の教育や地位向上を手助ける特別な経済的支援をすべきだと思います。これらの国々は南アフリカから多大な利益を受けているからです。

信じ難いことでしょうが平均的南アフリカの白人は、同胞の非白人である南アフリカ人の悲惨な状況について正確には知りませんでした。最近まで暴力行為に出くわしたことはありませんでした。その結果、参政権を与えられている人々から政治体制を変えるよう要求する圧力はほとんどありませんでした。しかしこの国の労働者からの圧力は高まり、政府は

もっと民主的な国になるよう努力しています。

ところが不幸なことに、自由を目の前にして黒人はその政治的、種族的違いから自分たちがひき起こす暴力にも苦しんでいます。子供たちがこのような暴力の中で育っているのが心配です。子供たちは闘争的になっています。ほとんどの人はなるべくものごとがないように暮らしたいだけなのです。そのため人々は文明国の正規の法律と、国を崩壊させ、無政府状態にしたがっている急進的な過激派との間で身動きがとれないでいるのです。

黒人指導者たち

南アフリカの大きな問題の1つは、すべての人に受け入れられる黒人指導者がいないということです。ネルソン・マンデラは今もお黒人解放のために戦っているのです。獄中にはいますがおそらく最も広く尊敬されている指導者でしょう。しかし政府は彼と交渉しようとはしません。

ブテレジはズルー族の指導者であり、ある条件のもとで政府と交渉するつもりでいます。しかし彼は1番人口の多い部族を代表しているので他の部族には受け入れられていません。

ツツ大主教は別の部族に属していますが、黒人だけでなく白人の英国国教会の指導者にもなりました。彼は人々の行動を自分に向けてよう持っていかせる傾向があり、彼を軽蔑する黒人を私はたくさん知っています。しかし多分彼の人気は黒人の中で増えていくでしょう。それはこの国に完全な自由をもたらす唯一の方法として、彼が心から支持している制裁の効果次第です。経済制裁によって主に黒人が苦しまなければならない経済的苦境に伴う暴力や苦しみを、彼がどのように受け入れるか私にはわかりません。

最後に

今や不確実なものが未来にのしかかっている時に来ています。私たちは今にも大量殺りくの一步手前にあり、もっと安全な国を求めて南アフリカを去っていかうと考える人もいます。おそらく日本人々にはこの国の白人が簡単にヨーロッパやアメリカに同化できることを理解しがたいでしょう。実際もっと状況がひどくなったら、多くの人がこの国を去るぐらゐの余裕があります。黒人は留まらなければならず、私たちみんながこの国に責任を負うのはまさに今なのです。しかし私は楽観的の見方をしており、新しい社会は価値あるものだとは確信しています。

(ケープタウン在住・医師)

ソエト行きのバス

加納 妙

無表情な人々

何かが違う，ということ，私はヨハネスブルクの町角に立って，感じていた。黙々と新聞を売る小柄な青年，バスを待つ長い列，何を待っているのか待っていないのか，公園に寝ころぶ人々，この町にも大勢の黒人たちがいる。

私はアフリカの印象を聞かれる時，よくこんな話をする。“ケニアからの帰路，ホンコンで日本人旅行者の波がこちらへ向かってくるのを見て，一種異様な恐怖を覚えたことがある。どの顔も無表情で，能面でもつけているように特徴がない。アフリカの国で同じような群集に出合ったとしたら，これは全然違う，群れの中の，一人一人の顔がどんどん目に飛び込んでくる”アフリカの人々の持つ野趣に満ちた生命力，私はこれを愛していた。

しかしここではどうだろう。その生命力を私は感じられなかった。押しつぶされた声にならないうめき……ヨハネスの町では，行きかう黒人達の顔が私の目に飛び込んでこない。彼らの顔から表情をうばったのが，南アフリカという国の現状であるならば，それはこの国の何よりも大きな犯罪だろう。

ここでは黒人達が自らの解放を求めてうごめいている，その息吹が伝わってこない。このままでは，あれは一部わからずやの若者達が目的もわからず治安をかき乱しているだけなのだ。という悲観的見方を，私まで受け入れてしまいそうだ。計5日の短い滞在中に会った白人達は，だいたいこうした見解だった。話をした何人かの黒人達も同様だった。「スクールボーイが…」とYMCAのcockさんも，くだもの売りのおばちゃんも顔をしかめる。problemだ。9月4日行われたこの10年で最大のスト(ソエトの80%近い人々が参加したと伝わっている)についても，道々会話を交した青年は，「仕事に出ようとすると駅で生徒達が実力阻止をしていて，電車に乗れなかったんだ」とむしろ迷惑顔をする。

あぶくの中の世界

このストは8月末，ソエト内で起った衝突中，警官に撃ち殺された26人の合同葬儀が4日に行われるため，彼らの死を悼んで行なわれたものだった。

しかし警察は合同葬儀を禁じ，集まった群集を追い散らした。催涙弾がとびかい，死者も出たといわれるソエトの緊張の最中も，車で20分と離れていないヨハネスの町にはごく日常の生活があった。事件はまったくベールのむこうの出来事なのだ。

南アの中には，重なり合わない幾つかのあぶくが存在しているように私は思う。それぞれのあぶくは，かなり具体的に異なった生活を，内側に収めている。形のあるものについても，無いものについても。例えば私は南アのある地方へ行こうとした。駅で白人の案内係に行き方を聞いたが，あるのは電車だけ，その先は週1回のバスしかないという。その場所に勤めていた白人女性も同じようなことを言っていた。しかし実際に行ってみると何便ものバス，それも直接ヨハネスまで行き来しているバスもあったのだ。そこに住んでいた彼女ですら，こんなことも知らないというのはどういうことだろう。地理的に共通した社会にいても，やはり彼女は大半の白人の属するあぶくの膜から出ることはなかったのではないか。

私は何人かの，ボーア系を含む白人と知り合いになったが，実は皆とても気の良い連中だった。YMCAに泊ったのだが，食事のたびにいろんな人が話しかけてきた。しかし彼らが気がいいだけに，やっかいな話しだと思わずにいられない。もちろん，「僕は黒人とも仲良くつき合ってるよ」と言う人も多いのだが，悲しいかな，そういつつも相手を自分と同質の人間として捉えていないのではないかと疑問を持ってしまう。彼らを包んでいるあぶくの膜とその中の世界が，やはりネックになっているのだ。

ソエトへ行こう

私はやはりソエトに行こう，と思った。彼らの側のあぶくにふみ込まなければ，たとえ彼らの中のうねりやさげびがあっても伝わって来そうにない。しかしそれは，そう簡単なことではなかった。「近寄らない方がいい」とだいたい皆そう言った。私が一番気になったのは，例えばタクシーで入った場合，私を連れて入ってくれたその人に迷惑がかかるんじゃないか，ということだった。多くの黒人が，白人に組みしたと疑われ主に若者達からリンチ，時にタイ

ヤを首にかけ火をつける、ネックレスという処刑を受けている、と聞いた。

しかし、ちょっとしたきっかけから、私を連れていってくれることになったミニバスの運ちゃんは、全然そんなことは心配していなかった。このミニバスは、ソエトとヨハネスの間を日に何度か行き来して客を運んでいる、私設バスだ。運ちゃんは、フレデリックという32才、丸顔、割りと大柄だった。しゃれたキャップを斜めにかぶっている。彼が気にしていたのは、白人警官の目だった。私をみつけたら、何でこんなところにいる、といういろいろさく言ってくるんじゃないか。しかし、彼は、15人ほどの客もつめ込み、ソエトへ向かって走り出した。道々、「大丈夫、見つかったら俺のガールフレンドだ、といってやるよ。そしたら問題ないさ」とウィンクした。今までとちょっと何か違うみたいだ。

隣の席の女の子は、ミリーという名のOL。大学を出て銀行に勤めている。真赤なセーターが、黒い膚にはえて、ちょっと私にはまねできない着こなし。彼女にソエトの様子をきくと、彼女は、スクールボーイズが…とは言わなかった。「警察がソエトに入り込んで来てかき乱しているのが悪いんだ」と言った。そうだと、といわんばかりに、フレデリックも隣りで力強くうなずいていた。

ストの時の様子を聞いてみた。前日に、ストを呼びかけるピラがまわってきて、自分も自主的に参加したんだという。「あなたはどっかの政治組織に加わっているの？」と聞くと、メンバーではないそうだ。ソエト内でのランチについては、「あれは警察に組み込まれた連中がああいう目にあっているのよ」という風に説明していた。ネックレスを、私は支持する気はない。しかし、それは、彼らのおいつめられた状況を表現しているのではないか、と思ったりもする。

“サンキュー マダム”

バスは舗装道路を走ってソエトの入口にさしかかった。一階建ての、こじんまりした住宅が並んでいる。1ブロック先の信号を指さして、「あれの手前はカラード、むこうはブラックの居住区だよ」とフレデリックは説明してくれた。ソエトはかなり広い地区だ。かるい傾斜の丘に、ずっと町が続いているのが見える。あちこちの町角で、順にお客をおろしてゆく。ミリーは降りる前、私に住所を渡し、手紙を書いてね、といった。

小さな商店街の前が、バスの溜り場になっていて、

ここで私以外のお客は皆降りていった。このあと少しソエトの町中を走って見せてくれるという。町は静かだった。多くの人とは動きに出ているのかも知れない。少し行くと、薄よごれた、長屋がいくつも建ち並んでいた。鉱山労働者用の宿舎だそうだ。「あの1室に7人も8人もが一緒に暮らしているんだ」フレデリックはあれこれと説明してくれる。学校もあった。しかし生徒らが授業ボイコットが続きいくつかの学校が閉鎖になった、と新聞で見た。

「どうだい、ひどいだろう、これがソエトの現状だよ」運ちゃんが指したのは、トタン板のほったて小屋の並んでいる一画だった。手前に金属性の青い筒が3つ4つ並んでいる。トイレだ。「まともなトイレもないんだよ」と彼は憤慨している。私は他でスラムとかも見てるので、それ自体にはたいして驚ろかない。がこれは比較で語れる問題ではない。

ゴミやガラクタのあふれた、何かこげ跡の見える広場の横を通った。「この辺で人が死んだんだ」という説明に、あわててカメラをかまえると、迷彩色のかたまりが視線をかすめる。かめの子型、コンバットが2台、兵士を乗せて角に止まっていた。「俺はあいつらが嫌いでね」とフレデリックはスピードをあげる。道端には、ストの時バリケードに使ったというブロックがいくつかころがっていた。近くには、政府が建てたという、割と新しいアパート群もあった。

運ちゃんは、自分は政治的人間でない、と注釈を付けながらも、「本当に政府のいうようにアパートヘイトがなくなったというんなら、なんで同じ仕事をして黒人の方が給料が低いんだ」と、やはり語気を荒らげる。が、それまで普通に話していたつもりなのに、最後にお金を払う時、その瞬間だけ“サンキュー・マダム、サンキュー”と急に何か卑屈な口調になったのが、やはり気になった。お金の介在で、私は彼の側のおぶくから、はじきだされたのだろうか……。

あるボーア系婦人がこんな風に語っていたのが印象に残っている。「3年後の総選挙の前にボータ大統領はきっと選挙権を黒人に渡す。しかしそうすると右派はだまっていけない。市民戦争になるだろう。私はそれまで長生きしたくないね」本当にそうなるのか。しかし問題は制度だけではなさそうだ。お互いの世界を包みこんでいる膜は、どうしたら除けるのか…。今南ア国内では、短期に政府がどうなる、といったことだけでなく、長期にわたるうねりが、黒人白人を問わず必要なだろう、そんな風に思う。

距離的に遠いこともあってか、とかくアフリカは日本人にはあまりなじみがない。独裁政治や飢餓などその時どきのセンセーショナルな話題がマスコミをにぎわすが、次々と入ってくる新しいニュースにとって変わられ、もう誰もアフリカのことは忘れ去ってしまう。

ところがここにアフリカに関わって20年にもなるというグループがある。アフリカ行動委員会である。このように長い間その意志を貫いてきた力は何なのだろうか。いったいどのような人々が関わっているのだろうか。恵比寿のオフィスを訪ねてみた。

その歴史と活動

アフリカ行動委員会の生みの親はアフリカ研究者であり文学者であった野間寛二郎である。1963年の「第3回アジア・アフリカ人民連帯会議」に出席していた彼は、ANC（アフリカ人民民族会議）から日本に反アパルトヘイトの運動を起こすように要請された。帰国後「南アフリカ人種差別反対行動委員会準備会」を結成し、翌64年1月に正式に発足させた。

その後半年でこの委員会は機能停止に陥るが、彼は「南アフリカ問題懇話会」というサークルを作り反アパルトヘイトの運動を続けた。1965年から67年にかけて日本の反アパルトヘイト運動は沈滞していったが、ヨーロッパの反アパルトヘイトの運動団体との接触とローデシア（現ジンバブエ）、ナミビア、ポルトガル領アフリカ（アンゴラ、モザンビーク、ギニアビサウ）等の解放運動とも関わるようになり再び活発になる。

1969年には「南アフリカ問題懇話会」に集まっていた若い人々を中心にして「アフリカ行動委員会」が結成された。現在は日本各地の9つのグループがJAAC（日本反アパルトヘイト委員会）を構成し、それぞれ独立しながらも連携した運動を行っている。

アフリカ行動委員会に関するQ&A

Q 今メンバーは何人ぐらいいますか

A オフィスに顔を出しているのは15人ほどです。全国でも70~80人というところでしょうか。それでも集会を呼びかけると100人ぐらいは集まります

し、名簿には500~600人の名前があります。

Q 日常活動はどのようなことをしていますか。

A 基本的な活動は、アフリカ問題に関する公開セミナー、南ア情勢や日本-南ア関係の調査・分析、それをまとめた年報の作成、南アに関与している日本企業や外務省、南ア領事館への抗議行動、ANCの学校（在タンザニア）への援助、南ア商品ボイコット運動などです。最近では南アフリカ外相の来日反対のピラを外務省の前で配りました。

今までのところ多くの人を巻きこむことはできませんが、自分たちが見える範囲で行動したいと思っています。お互いを理解することに努めており、あたり前のことかもしれませんが、手紙などの問合せにはきちっと応対するようにしています。

Q 活動に対して一般の反響はいかがですか。

A 飢餓キャンペーンに比べればアパルトヘイトに関心を示す人はほんとにわずかです。それでも最近ではメンバーや関係団体も全国的に増えています。また中学校や高校などから資料の貸し出し請求や、講演の依頼が増えています。日本の新聞に我々のことが載ることはほとんどありませんが、海外の新聞社、通信社からはよく問合せが来ます。

Q 今後はどのように活動を展開していきますか。

A 方針は今までと変わりません。集会に大ぜいの人を集めるのが目的ではなく、集まった人々が我々の活動を理解し、自分たち自身の問題として考えてくれるよう関係づけていくことが大切だと思っています。

具体的には南ア商品のボイコット運動などを消費者団体とか色々な団体、個人とコンタクトを取りながら広げていくことを考えています。そんなことは大した影響にならないという人もいますが、運動自体が日常レベルでの南アへの関心につながると思います。まだ個人的な思いつきですが、差別や第三世界と戦っている国内のいろいろなグループとシンポジウムを持ち、日本の自画像を描いてみることも考えています。これからは他の政治団体、市民団体とも交流を深め、運動の輪を広げていきたいと思っています。

Q なぜこの運動に加わったのですか。

南アフリカ年報1986年度
アフリカ行動委員会編集・発行
1986年4月20日発行 発行所

アフリカ行動委員会
Japan Anti-Apartheid Committee
〒100 東京都千代田区千代田1-11-304
南アフリカ問題国際センター
TEL. 03-432-9771

今こそ南アフリカに自由を! — 私達は何ができるか —

(特典) 日本を訪れたフリーダム・ファイター



パンフレット 300円

年報 1000円



映画会・学習会などのための資料

日本反アパルトヘイト委員会(JAAC)では、定期的にニュース等を発行しているほか、以下のフィルム、ビデオ、スライドを貸し出しています。

「デンバサ最後の墓 — アパルトヘイトの国南アフリカ」日本語版 60分カラー 16mm(1974)、VHSのビデオもあり。

「南アフリカ解放への道」 JAAC製作 20分白黒 16mm(1978)

「抵抗の世代 — 南アの民族解放運動」日本語版 30分カラー 16mm(1980)

「燃えあがる南アフリカ! — 南ア解放組織 UDFの記録」英語版 45分カラー 16mm(1986) VHSビデオもあり。

「よみがえれ! アルバート」英語版 60分カラー VHS、ベータビデオ(1983)

「サイモン・フェリサニ講演記録」日本語版 30分カラー VHSビデオ(1986)

「This is SOMAFCO」スライド 日本語版 テープ付

A 私は青年海外協力隊でアフリカに行くことがありました。私は以前からアフリカの問題に関心があったのですが、実際にアフリカに行ってみて、アフリカのことはもちろん日本やそれをとりまく世界について何も知らないということに気づきました。南アフリカと日本の関係はとても深い。今彼らのためというより自分自身の問題として活動しています。

よく日本の問題をさし置いてなぜアフリカのことをやるのかと問われますが、私たちはアフリカの問題は同時に日本の問題だと思っています。指紋押捺問題をなぜやらないのかという声も耳にします。でも実際にその運動をやっている人はそんなことはないと思います。それぞれの運動の関連性が見えているからです。お互いに協力し、支援しあっています。

Q 日本政府の対南ア政策についてどう思いますか。

A たしかに正式な外交関係は持たないなど反アパルトヘイトの姿勢はとっていますが、それは表向きで、ホッネは経済的な結びつきは強くしたいというところでしょう。政経分離という考え方は、お金さえもうかれればいいということで、不道德ではないかと思います。南アの希少金属に関心は払っても黒人のことを考えることはほとんどないのではないのでしょうか。

Q 南アフリカは今後どうなると思いますか。また望ましい解決方法は何かと思いますか。

A 黒人解放勢力、黒人の中での体制派などのいくつ

かのグループと白人の綱引きの結果どのような答えが出るか予想するのは簡単ではありません。私たちも武装闘争には反対ですが、黒人たちが何十年にもわたって非暴力抵抗運動を続けてきた歴史も忘れてはならないと思います。黒人たちは暴動ではなく抵抗しているのです。

これは推測ですが、黒人たちは決して武力解放の道はとらないだろうと思います。隣にジンバブエというお手本もありますし、ANCのマンデラやツツ大主教のように黒人の有能なリーダーたちもいます。彼らは白人との共存の道を捜すでしょう。

Q 南アフリカの黒人が解放されたらアフリカ行動委員会は解散するのですか。

A たとえ黒人政権になったとしてもアパルトヘイトがすぐに全部なくなるとは思えません。ターゲットは少し変わるかもしれませんが、我々は解散しないと思います。今までも南アフリカのことだけやってきたのではありませんし、ナミビアの独立支援とかやらなければならないことはいくつもあります。

Q 最後にどうしてアフリカ行動委員会はこんなにも長く運動を続けてこれたのでしょうか。

A まず最初にアフリカに興味があって、そこから問題に入っていったにしても、日本の問題として取り組んできたことがあげられるのではないのでしょうか。自分とのつながりを確認しなければ行動は長続きしません。

●葉書きアンケート

JVC会員は アパルトヘイトをどう考えているか

このアンケートは、JVC会員名簿から、100人を受作為に抽出し、質問事項を印刷した往復葉書きを郵送することで行われた。

発送は8月12日で、34通が9月15日までに返送された。そのうち、1通だけが南アフリカについて関心がないと回答した。アンケートの集計は残りの33通で行ったが、回答数が少ないので、すべての項目、すべての意見を残らず誌上に再録した。記名があるもの、無記名のものをすべて匿名にしたが、ある個人の意見の全体像を知る手がかりにするため、イニシャルをつけたアルファベットの前に住所があるものの大半は、回答が実名であったものを誌上匿名としたものである。

回答数が少なく全回答を掲載するため、統計的処理や分析・解説はなさなかったが、それぞれの質問に対する回答数を3倍すると、その答えに対する回答率（パーセンテージ、 $\therefore 33 \times 3 = 99$ ）がわかるはずである。

1 南アフリカについて関心がありますか？

- ①ある 33人
- ②ない 1人

2 何について関心がありますか？(いくつでも)

- ①希少金属・金・ダイヤモンド 5人
 - ②観光地として 3人
 - ③人種隔離政策(アパルトヘイト) 30人
 - ④黒人蜂起 16人
 - ⑤南アへの経済制裁 15人
 - ⑥その他 5人
- ・武力衝突なしに、アパルトヘイト廃止ができるかどうか注目している(杉並区I氏)
 - ・イギリスの対応(A氏)
 - ・歴史(文明、遺跡)(B氏)
 - ・イギリスの移民、植民地感覚(鳥取市H氏)

- ・生植物の回復と平和育成。人間環境をよくすること(新潟県S氏)

3.日本人は南アフリカで名誉白人と呼ばれています。そのことについてどう感じますか？

- ①名誉である 1人
 - ②とまどう 11人
 - ③憤る 18人
 - ④わからない 3人
 - 無回答 1人
- (重複回答1人含む)
- コメントだけ 1人

- ・恥ずべきことだ(③を回答した松山市K氏)
- ・人種差別政策に加担しているようで、恥しいと思う(②を回答したC氏)
- ・他の有色人種ほどではないが、結婚などについては、日本人に対しても差別しているわけだから、そのようなことばにだまされないことが、まず大切である(コメントだけの杉並区I氏)

4.日本は南アフリカにとって、第2位の輸出相手国です。今後日本は南アフリカとの関係をどうすべきだと思いますか？

- ①これからも主要貿易相手国としてつきあう

4人





- ②米・英が経済制裁したらそれにならう 2人
- ③白人政権がアパルトヘイトをやめるよ
うに積極的に働きかける 27人
- ④わからない 3人
- ⑤その他 5人

- 平和と教育。人間回復目指して、緑と文化を育成(前出新潟県S氏)
- 経済制裁が南アフリカ政府ではなく、現地
の黒人の生活を、より苦しめる事となると
聞いているので、経済制裁の手段に対して
疑問に思っています(横須賀市T氏)
- 積極的に働きかけるのは当然と思うが、そ
の手段が即、経済制裁とはいかないのが、
世界経済のどうしようもない流れだ(新宿
区D氏)
- 南アフリカのアパルトヘイトについて行動
を起こすと同時に、国内の外国人への差別、
管理体制にも反対し、日本人の心の中にあ
る排外意識をとり除くことに努力しなければ
ならない。このことなくして、真の意味
での南アフリカ制裁などあり得ない(E氏)
無回答

重複者5人、3項目を選んだ者1人を含む

そのほかに、南アフリカと日本との関係について
ご意見のある方は、お書きください。

- 日本に住んでいると、どうも「人権」というも
のに対して、ひどく鈍感になってくる。海外を
旅行する折には、日本国および日本人に対して
のこの種の鈍感さに憤りを覚える。が、日本に
住みはじめると、こういった重要な問題が先へ
先へと追いやられる忙しさだ。しかし、少なく
とも私自身は常に視野に入れて生活している。
(前出・新宿区D氏)
- もちろん南アには問題がある。が、その前に、
日本人は、アイヌ、沖縄、在日朝鮮人の問題に
どんな結論を下すのか。彼らを棚上げにしたま
まで、南アを論じてよいのだろうか？(前出・
松山市K氏)
- 悪いものは悪い……。しかしながら、我々はあ
まりにも南アの現状について知らなさすぎるの
ではないでしょうか。過去の歴史、いきさつも
含め、もっと情報が必要だと思います。でな
ければアパルトヘイトの実像すらつかめない(E氏)
- アンケートの4番の問いで私はできれば③の答

をしたいが、アパルトヘイトを体験しない日本
人が、どういう策で積極的に働きかけるか具体
的にまともらないので答えられなかった(愛知
県W氏、4番の問いには無回答)

- 南アの状況や、日本の南アとの現在の関わり方
などについて、マスコミのもっと人道的な立場
に立った報道を望みたい(F氏)
- アパルトヘイトは廃止されるべきだと思うが、
希少金属を握られている工業国日本としては、
たいへんむずかしい立場におかれていると思う
(G氏)
- その国(地域)の大多数の民衆を代表する政府
がつくられるよう支援すべき。その上で公正な
貿易関係をつくることは大切(H氏)
- 人種差別とは、いくらきれいな事であっても、す
べての人種が持つ本性のごとく思いますが、こ
れがいかに哀しいものであるかを理解する事が
必要と思います(前出・鳥取市M氏)
- 4.③について、これを実現するためには、南ア
フリカ以外の貿易国を開発する必要があるし、
南アフリカが周辺諸国への逆制裁を加えたら、
それらの国へただちに援助ができるような体制
を、他国とともに検討して実行すべきである。
(前出・杉並区I氏)
- 南アの黒人たちを、応援する側の日本の NGO
というか、私たちはまだまだ貧弱のようです
ね。残念ながら(日野市M氏)
- 南アフリカ、日本、みんな一丸となり人間回復
の形成めざして住みよい調和のとれた人間環境
を築き、すばらしい緑と文化を育成。正しく導
き明るい社会回復をめざしてください。世界
のお願いです(前出・新潟県S氏)
- 人種的偏見(*の是正)を白人に求める(アメリカに
おいても、日本人は黄色人種として偏見を受け
ている事から、正さなければならない)(I氏)
- このアンケートの結果をおしえてほしい。また
JVCがこの問題に対して、どうかかわって
いくのかも教えて下さい(三重県O氏)

女の仕事について

農業技術者 伊藤幸子

暇をみつけちゃあ人の家に上がりこみ(？), スケッチをさせてもらいました。今回ご紹介するのは“女の仕事”です。これからも“女の仕事”をみせてもらい、やらせてもらい、楽しませてもらうつもり。そのあと“男の仕事”にでも。

女性は一日中“食べること”の準備をしているといってもいいすぎではないと思います。主食のインジェラを焼くために、種子からゴミを取り、粉にし、水で練り、そして焼く。その他に同じように豆を粉にする。またはゆでる。おかずのジャガイモをゆでる等々。それに日に何度かの水汲み。その合間に草でかごを編んだり、髪を編みあったり、そう、薪集めも重要な仕事。家畜の糞出し、畑の草とり、洗濯、子供の世話、酒のしこみ。どれもこれも手が足が生きて働くのです。子供も同じこと。親が働くように同じように働いています。

①村のポンプが故障して数カ月。ポンプに近い人までが茶色に濁った川の水を朝に晩に汲んで家に帰る。水がめ自体が重い。さらに水を加え、上にひょうたんでふたをして担いで帰る。小さい子には小さい壺。

①



ある時4～5歳の女の子の壺に何の拍子か穴があった。水を汲み終えた後で、そこから水が飛び出る。ワーッとひと泣きの後、自分の腰に巻いた布をひきちぎり、口にふくんでぬらし穴を埋めた。まったく大人と同じ処置を簡単にしておいて、こちらがびっくり。

②- 1家のすみに備えつけられた粉ひき器、これは二連結。一つだけのものもある。大麦、小麦、テフ、ソルガム。二連結では親子共同で二度びきしていることもある。粉を受けるのは水がめの底を抜いたもの。朝の6時ごろからこの仕事のゴシゴシという音が聞こえてくる。特別な石を切り、台にして上から他の石でゴリゴリすべらせる。

②- 2木で作った臼と杵。これで大麦、からす麦等のもみがらを取り除いて粉ひきをする。

②



1



2

③家は丸屋根あり、四角い屋根あり、トタン屋根もあれば草で葺いている家もある。壁は泥壁。

この家は丸屋根で、半分は家畜小屋、そしてあと半分がひとのため。石で囲んだところで調理し、火を囲んで食事し、この周りで寝る。泥でできた腰掛けが作りつけてあって、一部が広がっている。そこが昼間は腰掛けで、夜は寝床となる。

この家族は夫婦、ばあちゃん、子供4人、馬2頭、羊が10匹ほど。どこにどうして寝るのか、今だに私にはわ

③



からない。毛布も見あたらない。着替えの服もどこにあるのか。でもこれだけ大きな壺やかめがある家は珍しい。(土製で、大きいのは穀物入れ、少し小さいのは自家製の酒を入れる)

薪は毎日見つけてくる。今は大麦をいっているところ。いった麦を子どもはポケットにつめて家畜とともにでかける。これがおやつ。

④インジェラを焼く。主食のインジェラは茶色のクレープ風。最初見たときはぬれ雑布かと思った。最初の味はすっぱく、まったくこれからこれを食べ続けていかなくちなんないのかとがっかりしたこと。それなのに今はガツガツ食べている。慣れてしまうものです。

⑤草で生活用具(かご、インジェラを置く台、もの入れ……)を編む。色のついた草(染色したのを市場で売っている)をとところどころに入れて模様を入

④



⑤



⑥



れたものなど、なかなかすばらしい。このおばさんは目が悪いので、暗い家の中での手作業はつらいことだろう。

⑥この家ではお酒を売っている。今アラキ(日本ではいば焼酎)を作っている。水がめの中に小麦、大麦、ソルガム(原料についてはまだ深く追求していない)を入れ、火をつけ、蒸留させる。それを竹の筒から水の中に入っている水筒に入れる。まったくこんな簡単な装置で酒ができるなんて。これは確実に身につけたい技術です。

おまけ

これは絵には描いていませんが、道々目についた“便”について。こちらではトイレのある(といっても穴を掘って、そこに木を渡すのみ)家よりない家の方が多く、したがってそこいらで用を足しているようです。ある夕方など女の人們が薄暗くなった広っぱで何のおしゃべりをしているのかと思ったら、これが用たし。そしてこれ、大雨ですべて流れ去ってどこへ行くのでしょうか。

その便、実に日本人のものとは違って(多分)、粘土のようなものじゃなく、粗く、そしてフワッとしています。大量だし、ほどよい固さで感心しています。食生活のなせるわざだと思います。彼らが取る繊維の量はかなりだと思いますから。

これは道々感じたことです。

クロントイ・スラムとカオイダン・キャンプを訪ねて

トム・エスキルセン

今年の7月、私はタイのクロントイ・スラムとカオイダン・キャンプを訪れることができました。クロントイには7月8日に佐藤正喜さんの案内で、カオイダンには7月9日、10日と、熊木さん、谷山さんにお世話になりながら見学しました。インド、パングラディッシュに8カ月ほど旅行をしてから日本に帰る途中、タイに12日間立ち寄った際のことです。

短い時間に、あれもこれも欲ばって見ようとしたため、表面的な印象だけで終わった気がします。現場で活躍していらっしゃる皆さんの率直な意見を聞き、実際に自分の目で現地を見ることができたのは大変よかったですと思います。

クロントイ・スラム

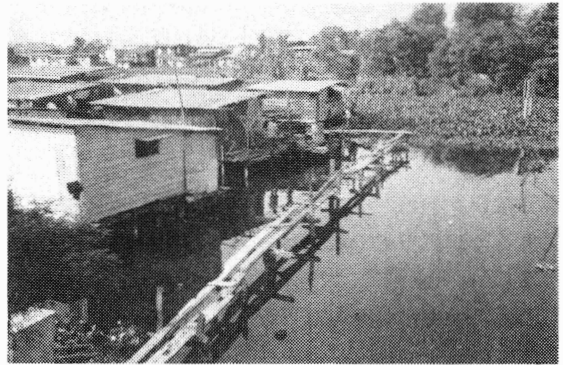
限られた環境の中で生活を楽しむ

クロントイ・スラムで受けた第一印象は、人々がたくましく、生き生きと生活しているということだった。広場で遊ぶスラムの子供たちは質素ながらきれいに洗った洋服を着て、元気にボールを蹴りまわっていた。

ごみの散らかった沼地の上に脚柱を立て、材木の切れっぱしやトタンを張り合わせて作った住居は確かに密集していて、環境は決してよくない。あの中で薄い壁ごしに聞こえる隣の赤ん坊の泣き声に悩まされながら、家族全員がザコ寝の寝苦しい夜を過ごすのだと思うと大変だなと思った。でも家の中をのぞけば、中はキッチンと整理され、写真なども飾ってある。15軒に1軒ぐらいの割合でテレビも置いてあり、近所の人々もいっしょに見入っていた。限られた物とスペースで、できる限り家庭的な雰囲気を作り、生活をエンジョイしようとする努力を感じた。

佐藤さんが住んでいるスラム内の下宿では家賃の高さを聞いて驚いてしまった。6畳もない板だけのその部屋で月500バーツ。子持ちの夫婦が住むのならその倍の広さは必要と思われる。一家の収入が、2000～3000バーツそこらだということを思えば、スラムに住んでさえも家賃の重みがどれだけ大きいかがわかる。

お父さんたちは港で荷物の積み下ろしやゴミ処理、工場での長い肉体労働をやり、お母さんたちは家事



がすむと、売るためのお菓子や品物を用意して街頭に並べ、子供もバスの呼び込み（車掌）や売り子をやって、スラムでは家族全員が一家を支える大切な労働者だというのがよくわかった。

中には自分の妻(?)をオートバイの後ろに乗せて、パッポン通りの赤線街に「通勤」させている男性の姿も見かけた。このような安い労働力を提供して、スラムの人たちは国の経済成長を支えている。バンコク市の全住民の20%が、市内数十カ所に散らばったこうしたスラムに住むという。

立ちのきが人々にもたらしたもの

港湾区の拡長工事のためにスラムの人々に大幅な立ちのき命令が出た時、タイ政府はかなりの費用をつぎ込んでクロントイの他の空き地への移転の世話をした。沼地の上に網の目状にコンクリートの歩道を張りめぐらせ、電気・水道の便を計って、歩道に区切られた各ブロックを安く借りられるようにした。そればかりか、立ちのき場所から移転先までの資材の運搬に軍のトラックが出勤し、兵隊がスラムの人に混じって荷物運びを手伝ったという。

この裏には民衆の不満をやわらげ、対外的にも政府のイメージをよくするという政治的意図が感じられる。クロントイに人々の目を向けさせることは、逆にこのような措置が遅れている他の大多数のスラムから関心をそらすことにもつながる。

また、移転先での居住権をいち早く入手した人たちはよいが、遅れて、あるいは安い借り賃も払えなくて居住権が取れなかった人たちは、またいつ立ちのかされるかわからない別の所に、再び不法居住せ

ざるを得ない。逆に幸い居住権を取った人達の中には、大借金をしてでもリッチな家を建て、それを又貸してひともうけしようとする人も少なくないという。

新地区に住むはずだった人は別のスラムに移り、土地成金の夢を見ながら借金地獄に陥ろうとしているのかも知れない。

しかし、この新地区での生活環境は、立ちのき前と比べると相当よくなったことは否めないし、特にこの前の大火災の時に、政府の造ったコンクリートの歩道のおかげで避難がスムーズに行われ、死傷者の数が少なくて済んだことは、多に評価できる。

クロントイだけでなく、市内に散らばる他の多くのスラムにも、もっと関心が向けられ、この様な小さな改善が進められることを望む。

日本からの支援や関心も、立ちのきや火災といった、目立ったニュースになるような事だけにでなく、ニュースで取り上げられない、根の深い慢性的な問題に、もっと向けられるべきだろう。

カオイダン・キャンプ

人々から誇りが消える

カオイダン難民収容センターを訪れた時の第一印象は、その環境の不自然さと人々の活気の無さだった。クロントイの人たちから伝わってくる生活のエネルギーというか、誇らしさといったものが感じられない。むしろ自分の力で未来を切り開くことのできない環境に押し込められて、人の善意、援助と呼ばれるもので食べていかなければならない状況から作られてしまう、人々の卑しさ、うしろめたさの様なものを感じた。

どこかの国への受け入れが決まるまでの長い間、この人たちは仕事もなく未来の展望もなく、じっと待っていなければならない。早く受け入れてもらえるように彼らができる事はさほどない。というのは、彼らがいっつキャンプチアを脱出したか、それ以前に国内で何をしていたのか、そして受け入れ国に彼らの親戚がいるかどうかといった、過去の既成の事実で、ほぼ受け入れが決まってしまうからである。

キャンプに入った以上、彼らに出来ることといえば、語学や職業の訓練を受けたりキャンプ内のボランティア奉仕をしたりして、良く評価されるための材料を、収容中に少しでも増やすことぐらいだ。

例えば、ある人がボル・ポト時代に政府の何らかの仕事をしていたというだけで、本人はもちろん、その家族や親戚もアメリカへ受け入れてもらう事は、

ほとんど不可能になってしまう。また、生活のためにいやおうなしに、あるいは強制されて、そのような仕事をしなければならなかった人たちも同様だ。判断材料が乏しいため情状酌量の余地が少ないようだ。

合法的難民と非合法的難民と

正確な時期は忘れたが、84年の何月か以降に脱出してきた人たちは、国際法上定義される難民とは認められず、UNHCRの対象外の存在とされている。これは、引き続いての受け入れが、経済的理由の流民を増加させており、これらの人たちは迫害から逃れて来た純粋な難民とは違うと見られているためである。

逃れた事情が何であれ、ある日を境に、その前日までにキャンプに着いた人たちは難民として認められ、その次の日に着いた人は認められず、別扱いを受ける。人道上の理由から、彼らにも食糧配給が受けられるように、Ration Cardは配られるが、合法難民が持つFamily Cardはもらえず、第3国移住の望みもほとんどない。

生き抜くための工夫

また、収容センター内での生活を、難民たちが自分の力で良くすることにもかなり限界がある。

タイ政府の命令で、難民たちが収容所の外に出ることも、いかなる経済活動に携わることも禁止されている。これは、国内へのスパイの流入と、キャンプチアへの物資の流出を防ぐためとされている。

脱出した時に、貴重品を盗まれずに持って来れた人たちは、それを闇市に売って生活用品を買うことが出来るし、諸外国に親類のある人たちは、出入りの許される人々が運び人になれば、外から仕送りをもたらすことも可能だ。でも、もともと貧しかったり、逃げる途中盗賊にあたりして何ひとつない状態で来た人たち、また仕送りをしてくれる親戚や友人のない人たちの生活は大変だ。

こういう現状では、多くの難民が配給品や補助給食を余分に取るために、いろいろインチキをするのも仕方ないことかもしれない。配給品は家族単位で配られるが、受け取りには婦人だけが行くことになっている。また民間団体のやる補助給食も、妊婦や乳児をもつ母親、あるいは身長何センチ、体重何キロ以下の子供だけが対象となるのが普通だ。

そういった配給を余分に取ろうとして、男がキレ

いに女になりすましたり、子供が身長を計るときにねこ背になったりひざを曲げたりして身長をごまかそうとすることが頻繁にあるという。あるいは配給カードを受け取った後、再び列の後に並んでもう一回取ろうとする人もいるという。

私がキャンプに入った初日、CAREと言う団体が妊産婦のための補助給食のスクリーニングと登録を行い、私はカード配りを手伝った。その日もいったん会場を出ながらも再び中に入ろうとする女たちがいた。スクリーニングを監督する援助団体の人たちの態度も、仕方なく、拒否的でいささか乱暴になっているように思えた。また、幸いカードにありつた人たちは、何度も頭を下げながら、何ともいえないしろめたような視線を、私たちに向けていた。

確かに難民たちが逃れて来た恐い状況と比べれば、少なくともさしせまった命への危険がないだけでもキャンプが彼らにとって安息の地になっているということもできるだろう。

しかし、タイ政府は近く、カオイダン・キャンプを閉鎖すると言っている。それまでに受け入れが決まる人たちはよいが、そうでない人たちは、第3国への受け入れの可能性のない、より危険な国境ぞいのキャンプに送り返されることになる。

わたしたちにできること

こういう状況の中で民間団体が難民のためにしてあげられることには、かなり限界があると感じる。ノンチャンでJVCがやっているような補助給食プログラムや、各団体の医療プログラムのような基本的

なものほかに、西崎記念技術学校のような職業訓練や語学研修を始めとする各種の教育プログラム、クメール文化を保存しようとするプログラム（曹洞宗）など、さまざまな有意義な活動が行われている。それは必要なものであるが、本当に一時的な、その場限りのものでもある。

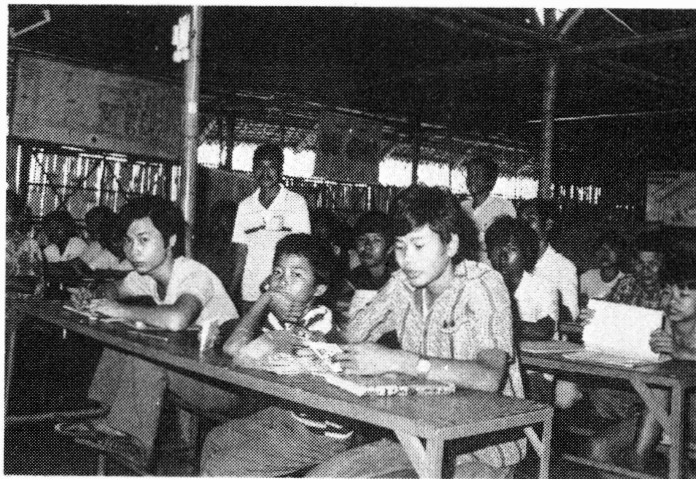
また、いくつかのプログラムの中には、時間をもてあました難民たちにひまつぶしの場を提供することが目的であるかのように見えるものもあった。それも確かに難民のニーズのひとつかも知れないが、その時間をもっと活かす道がないのはどうもはがゆい。

難民たちの運命は、本人の意志と無関係に政治という得体の知れない巨大な渦の中に巻き込まれているように見える。第三者に出来ることと言えば、その場その場にあってできる小さな助けを忠実にやり通し、あとは彼らとの出会いを大切に、彼らの幸せを願うことぐらいだろうか。

危険になったら、嫌になったら、彼らを取り残していつでも安全なところに脱れられる、安易な第三者の立場から、「友情」、「信頼」という言葉を口にするのは、おこがましいかも知れない。私たちと彼らとの間のこの大きなギャップを忘れてはならないだろう。

今回のキャンプ訪問は、この様なギャップを超えて、同じ人間として理解し合い、連帯していくことの難しさと大切さについて考えるいい機会となった。

（原文は日本語）



西崎憲司記念技術学校では1000人もの生徒が学ぶ

カオイダン・キャンプのブラックマーケット



タイの仲間たち

- ①名前 ②生年月日 ③出身地、国籍 ④JVCに入った、あるいは活動に参加した日 ⑤JVCに入る前は何をしていたのか ⑥なぜJVCにかかわったのか ⑦仕事の内容 ⑧JVCについて感じていること、または提言 ⑨これからどのようなことをしたいか ⑩ほかの国で働いているメンバーに伝えたいこと。



カオイダン



- ①ソムヨット・ラタナタム
②1957年9月10日
③タイ
④1983年12月14日
⑤カオイダン・キャンプのCRS (アメリカのNGO) でカンブチア難民を助けるために働いていた。
- ⑥JVCが難民キャンプや国境、さらに他の国々においても難民や貧しい人々を助けているから。
- ⑦カオイダンの技術学校のドライバー兼アシスタント・スーパーバイザー
- ⑧よいプログラムだ。難民たちに良い経験となっている。
- ⑨JVCが仕事を継続し、キャンプや国境で難民や貧しい人々を援助し続けることを願っている。その上でJVCがタイの農村でプログラムを行うことも望んでいる。なぜならタイのいくつかの地方では水が不足している。私は彼らを助けたい。
- ⑩私はJVC技術学校で学んだすべての難民が第三国で幸福になれることを願っている。



- ①谷山博史
②1958年3月18日
③東京都
④1986年5月5日
⑤学生。政治学を専攻しており、机の上で政治のことを、世界のことを、思想のことをあれやこれやと考えていた。
- ⑥自分の勉強が現実の世界から遊離していくことを危惧したため。自分の勉強は正義とか平和とかいった高い理想を掲げるけれども、冷暖房完備の研究室の中で概念をいじくりまわしても何もわからなかった。こうした価値が国際政治の中でどういう意味を持つのか。これらを失われた人々がどういふ状況に置かれ、彼が何を思うのか知りたかった。

- ⑦会計業務、コーディネーターの補佐
- ⑧JVCはまだ著しく発展途上にある団体なので、まだ活動の核になる理念を持つに至っていないことは理解できる。しかしわれわれが個々のプロジェクトにおいて、どれだけ効果的に活動し得るかということについての信念を持つことは大切だと思う。そのためには個々のプロジェクトについての厳密な評価が必要だし、その材料となる受益者の追跡調査も必要だと思う。こうした目に見えない努力を積み重ねていきたい。
- ⑨国際社会の緊張、矛盾を難民の友人、知人を通してまた自らのかかわっているプロジェクトのあり方を通して自らのものとして感じとりたい。そしてこうした体験を整理し、あるべき社会の展望を自分なりに獲得するためにもう一度じっくりと勉強したい。
- ⑩現実の必要を厳しく見つめながらも、心の中に常に理想を保っていてほしい。決してプロジェクトのためのプロジェクト。JVCのためのプロジェクトにならないように心がけてほしい。

ノンチャン



- ①仲田奈々子
②1962年9月25日
③沖縄県
④1985年10月20日
⑤学生
⑥難民、そして第三世界というものに興味があったから。日本という恵まれた国だけを見て一生を終わりにしなかったから。
- ⑦栄養士
- ⑨もう一度学校に行きたい。そして低栄養、第三世界等を中心に勉強し、またそれを生かして働きたい。
- ⑩もっとコンタクトをとれたらと思う。特に栄養士として働いている人と、お互いの情報を交換しあえたらと思う。

JVCプロジェクト

1986年9月25日 現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
東京本部	<p>渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報等。 機関誌『トリアル・アンド・エラー』発行。 JVC 説明会 - 毎月第1月曜日 午後6時~9時 * 第3日曜日 午後1時~4時 学習会 第4月曜日 午後6時~9時</p>	全国社会福祉協議会	岩崎駿介 (代表) 星野昌子 (事務局長) 柴田久史, 佐々木志保, 加納 妙, 前川昌代, 佐久間典子, 古西 勇, 他15人
日本国内	<p>●日本語家庭教師 新しい体制も決まり, 各地域でのボランティア募集を開始した。専門家の協力をあおぎオリエンテーションの充実を図ることで, 活動者がより有効な活動を進められる様, 工夫した。 大和日本語教室は10月12日より第8期を開始。埼玉柳崎地区で子供クラスを開設。人手が足りないので活動者を募集中。 機関誌『そんぼっと』を発行している。</p>	ジャパン・タイムズ 神奈川県福祉部	森山久寿子, 落合正幸 地区連絡係10人 他約50人
ソマリア モガディシュ 事務所	渉外, 事業計画, 会計, 総務。	UNHCR R.I. ジャパン 創価学会文化・ 平和運動事務局 ジャパン・タイムズ	嶋 紀晶, 浜野敏子, 五十嵐裕昌, シアッド
マガネイ・キャンプ (ゲドー郡)	<p>●農業による自立促進 / 定住 土地疲弊, 農民の土地離れなどが問題。 用水技術改善の為, 中田正一さん (風の学校) らが研究していた水車, 風車をソマリアへ送った。</p>	ジャパン・タイムズ	鴉田三芳, 荻ノ迫善六, 山口誠史, 柿原建三, 法橋 亮, モハメッド, ラジッド, ハジ, アオキ 船川秀夫,
マグドール・キャンプ (ゲドー郡)	<p>●医療・保健 / 補助給食 難民移送が再開。親が子供を残して出発する様なギリギリの人的状況がみられる。 移送が完全に終るまで見守りたい。</p>	朝日新聞厚生文化事業団 モラロジーMIRC 仏国土をつくる う会	樫田秀樹, 石井弘代, シェイク・アブディ
ジャボレ・キャンプ (ヒラン郡)	<p>●医療・保健 / 補助給食 ルークからの難民1220人がトラック31台で到着。彼らはサウジアラビアからの食糧, UNHCRで用意した薪と ERDISの水の配給を得て, ブッシュの中で夜を過ごす。</p>	砂漠に種をまく 人の会	掛村 均, 米澤 聡, 中路美和子, 庄司 美, 高畑辰弘, シュクリ, ハッサン, アブディ
エチオピア (ウォロ州)	<p>●総合的復興促進 種子銀行では貸し付けた種子の利用状況調査中。試験農場では, 同じ種子を蒔き, 成育状態をみている。 倉庫, 事務所完成。子供達の健康, 栄養調査, マーケット調査等進行中。</p>	朝日新聞厚生文化事業団, 山の手(チャリティー) ウォーク, CRDA 西本願寺 モラロジーMIRC チャリティー・カ レンダー	内山田 康, 林 達雄, 伊藤達男, 伊藤幸子, 内藤のぞみ, 久田信一郎, イエットベルク, ソロモン, パレタ, フェテルワ ルク, ダニエル
人材派遣プロジェクト			
フィリピン (PFAC, バラワン島)	●国際移民委員会(ICM) - 第三国定住手続きにともなう医療業務及びキャンプ内でのプライマリ・ヘルスケア。	城西病院	青井千恵

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
タイ バンコク事務所	渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報、バザー、古本のセール。季刊『ニュース・レター』（英語・タイ語）発行。	全国社会福祉協議会	ポンピモン・チャイブーン、カモン・ミンムアン、石原淑子、他約10人
カオイダン (カンブチア 難民キャンプ)	●西崎憲司記念技術学校 自動車、単車、1シリンダーエンジンの整備と溶接の基礎訓練を実施。上級のクラスとしてのワークショップでは、キャンプ内のボランティア団体の所有する車両の修理も行なっている。 第3期の授業は9月22日に終了し、10月から今年度最後の第4期に入る。	UNHCR R.I. ジャパン 妙心寺派宗務所 花園会	熊木政江、谷山博史、トンチャーイ・ソムカネ、ソムヨット・ラタナタム
国境のサイト2、 ノンチャン (カンブチア 難民村)	●補助給食 外部からの攻撃はないが、内部でのクメール人同士やタイ兵士がらみのいざこざが原因で緊張。キャンプ内の食糧配給所で爆発も起こり、女性が1人大怪我し、2日間立ち入りが制限された。来月から久しく行なわれていなかった家庭訪問が再開される。	WFP/UNBRO	テリース、ブーム、トンチャーイ、蓮尾慶治、仲田奈々子、ソムボン、スピチャ、エンドリアン、ソムサック、スリベン
バナニコム (第三国定住待ち 難民一次収容施設)	●文化オリエンテーション ●日本定住予定者 ①日本語学習の基礎(読み、書き、聞き取り) ②日本語の日常会話の習得 ③日本に関する概略的な理解を促す ④渡航に必要な事柄への理解と実習 ●日本以外の国への定住予定者に手続きの理解を深める。 ●子供レクリエーション・プログラム ペーパークラフト、リズム音楽、集団ゲームなど。	天理教千葉	浜崎妙子、大場きみよ アナン・ブッタミリンパティ
地域開発 (バンコク市内の スラム地区)	●奨学金援助 スラム在住児童が小学校(6年間)を卒業できるよう援助している。本年度の対象者は10のスラムで16校250人。 ●クロントイ図書館 クロントイスラム住民の就学前児童から成人までを対象としている。12区における新図書館建設のため、NHA(住宅公社)と交渉中。 ●移動図書 ラプレー、ナンシーのスラムで子供向け図書を中心に回覧。 ●移動学習センター(プラティープ財団、FFSC、JSRCとの共同プロジェクト) 9のスラムで学習の機会のない子供たちのため人形劇などで教育を行っている。 ●再定住 ラッカバン地区において再定住したバンコク市内の人たちへの資材援助(長期資金貸与方式)。	モラロジーMIRC NTV、JOFIC 庭野平和財団 京都国際青年委員会	ヴァラナート・チュンクン、サムルエイ・ジョンヨークラン、アルニー・スニット・ムンナイ、レラ・クンナロン、スワン・リンサムペン、コメイン・スンサマラ 佐藤正喜
カンブチア (ブノンペン)	●カンブチアの人々への総合的人道援助 救援のためのワークショップ/技術学校の建設工事がセメントの到着を待って始められる。OXFAMと共同で井戸掘りプロジェクトを行うための交渉が重ねられている。 ブラック・ピノウの孤児院の老朽化した男子用宿舎の補修のための資金援助を、ワールド・ビジョンを通じて行っている。	日本青年会議所 関東地区協議会、 全国老人クラブ 連合会、創価学 会文化・平和運 動事務局 モラロジーMIRC	熊岡路矢、養田健一

JVCの活動とその目的に御理解を

▶**JVCとは**—Japan International Volunteer Centerは1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れに、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶**JVCの会員募集について**—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員
 - 一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
 - 団体会員 30,000円 学生会員 3,000円
- ・賛助会員 金品による支援(金額は自由です。)

▶**機関誌『Trial & Error』のみの購読について**

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶**送金の方法**—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい。)

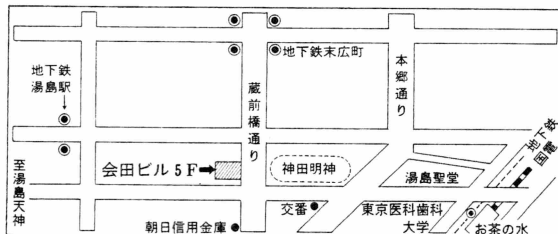
▶みなさまの募金を支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. **アフリカ難民救援募金** (9月小計 29,100円) アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. **インドシナ難民救援募金** (9月小計 8,500円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- C. **カンブチア募金** (9月小計 72,000円) カンブチア国内の復興のために使われます。
- D. **クロントイ・スラム募金** (9月小計 313,000円) バンコクのクロントイ・スラム内の図書館の運営およびスラム立退き者のための建築資材購入費に使われます。
- E. **テッグ・スラム奨学金・基金** (9月小計 46,000円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
- F. **日本語家庭教師募金** (9月小計 62,000円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- G. **医療募金** (9月小計 7,000円) 緊急事態が発生した場合、速やかに医師を派遣したり、医薬品などの緊急救援物資を輸送するために使われます。
- H. **ボランティア募金** (9月小計 2,000円) 現場で活動を続けるボランティアの健康管理費にあてられます。
- I. **JVC運営経費募金** (9月小計 7,000円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. **無指定募金** (9月小計 169,467円)

▶**送金の方法**—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。
 東京9-27495(募金種目名をご記入下さい。)
 加入者名—JVC東京事務所

編集後記

▶中曽根首相のアメリカの少数民族への差別発言は思わず本音が出てしまったのだろうが、民族差別の感情は根深い。多くの場合それは無知と無関心がもたらしたものだ。南アフリカのレポートを読んで驚くのはそれぞれの民族の垣根の高さだ。白人は黒人のことを卑しい仕事をする人間と決めつけ、黒人同士でも自分の生活に直接関係のないことは避けている。優位に立つ人間は経済や教育の不平等を棚上げにして他者を見下す。南アフリカはそれが法制化された特異な国だが日本も例外ではない。JVCのモットーの「広く認知すること」は垣根越しにお互いを覗くだけだが、それでも垣根を低くし、出入口ぐらいは作りたい。



昭和61年10月20日発行(毎月20日発行)

編集人 前川 昌代
 発行人 星野 昌子
 発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所
 〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階
 ☎03(834)2388 Telex:2323187 JVCHQ J
 バンコク事務所 JVC THAILAND
 67 South Sathorn Road
 Bangkok, THAILAND
 ☎(286)4857
 Telex:87032 COMSERV TH
 ソマリア事務所 JVC SOMALIA
 c/o UNHCR P.O. Box 2925
 Mogadish, SOMALIA
 Telex:794 HICOMREF SM
 エチオピア事務所 JVC ETHIOPIA
 P. O. Box 6941
 Addis Ababa, ETHIOPIA

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

*本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

定価 送料共300円